

筋弛緩法群 44 名、統制群 56 名)。ストレッチング群、漸進的筋弛緩法群は共に「リラックス体操」と名付け、1 週間継続してクラス全員でリラクゼーションを 1 日 1 回実施した。統制群はアセスメント（小学生用ストレス反応尺度）のみを実施した。プログラム効果の査定：①小学生用ストレス反応尺度（嶋田他，1992）。4 下位尺度によって構成される。②生理指標（心拍，血圧）。腕時計型簡易心拍・血圧測定器（OMRON 社製）を用いて、クラス全員の心拍数，血圧を測定した。

【結果と考察】ストレス反応尺度に関して，ストレッチング群と漸進的筋弛緩法群の両群において，実施前よりも実施後に得点の減少がみられ，統制群よりもストレス反応得点が低い結果となった。抑うつ・不安得点に関しては，ストレッチング群は漸進的筋弛緩法群よりも有意な得点減少が認められた。また，心拍と血圧の変化について，漸進的筋弛緩法群よりもストレッチング群において有意な減少がみられた。以上の結果から，ストレッチングを用いたストレスマネジメント・プログラムがストレス反応を減少させることが示された。本研究において，体育の授業などで多くの児童が経験しているストレッチングがストレス反応を減少させていたことは，学校現場における児童のストレスマネジメントとして非常に有用な手段だと考えられる。

引用文献

Carlson, C. R., & Curran, S. L. (1994). Stretching-based relaxation training. *Patient Education and Counseling*, 23, 5-12.

8. クリニカルパスにおける査定と治療効果判定ツールとしての TCI, エゴグラムの有効性の検討

春名 大輔

2003 年 4 月より，日本においても，全国 81 施設の特設機能病院を対象に急性期入院包括評価（Diagnosis Procedure Combination: DPC, 診断群分類）が導入され，クリニカルパスに注目が集まっている。クリニカルパスというアプローチ

の最大の目的は，質の高い医療を提供するとともに，入院期間の短縮を図ることである（Zander, 1988）。今後，包括医療の導入により，より正確な診断が求められると考えられる。このような状況の中，われわれ心理臨床技術者が提供するサービスの一つである，パーソナリティのアセスメントが診断や治療方針の決定の一助となるには，パーソナリティが診断にどのように寄与しているのかを確認する必要がある。また，患者のパーソナリティがどのようにクリニカルパスに有益な情報となるのかを検討する必要がある。しかしながら，クリニカルパスの視点からパーソナリティと入院期間や入院治療のアウトカムとの関係を検討した研究はこれまでほとんど行なわれていない。目的；クリニカルパスにおけるパーソナリティのアセスメントの有効性を検討する基礎的研究として，Cloninger et al. (1993) の Temperament and Character Inventory (TCI) と東大式エゴグラム (TEG) のパーソナリティ特徴と診断，入院期間，治療評価との関連を明らかにする。方法；2004 年 1 月から 2005 年 4 月の期間に，札幌にある精神科病院に新規入院し，先の期間内に退院した患者の診断，年齢，性別，TCI, TEG, 入院期間，入院時および退院時の Global Assessment of Functioning (GAF) のデータを分析対象とした。TCI と TEG は入院治療に際しての心理アセスメントとして行っているもので，本研究では，TCI, TEG の回答を得られた患者 154 名（男性 49 名，女性 105 名）のデータを分析に用いた。

【結果】平均値の比較，診断を従属変数とした判別分析の結果から，男性では，診断カテゴリーに特徴的なパーソナリティを見出すことは出来なかった。女性では，TCI の ST が低いと摂食障害患者である可能性が高いことが示唆された。また，入院期間とパーソナリティ尺度の関係については，女性においてのみ，TEG による合成得点である社会的活動性の得点（NP + A+FC-CP-AC），TEG の A と有意な相関がみられた。退院時の GAF とパーソナリティ尺度の関係については，男性では TCI の C と有意な相関がみられ，回帰分析の結

果からCは退院時のGAFの分散の17.9%を説明していた。女性ではTCIのSDと有意な相関がみられ、回帰分析の結果から、退院時のGAFの分散の6.2%を説明していた。

【考察】統合失調症、感情障害、神経症性障害、摂食障害、人格障害といった異なる診断カテゴリーに特徴的なパーソナリティは見出すことは出来なかった。しかしながら、女性において、TCIのSTが低いと摂食障害である可能性が高いことが示唆された。また、TEGによる合成得点やTCIの性格次元と入院期間、退院時のGAFに関係が見られた。したがって、パーソナリティのアセスメントの結果から、入院期間や退院時の精神的健康度といった視点で、異なる経過をたどると予測される群を構成し、それぞれに異なるクリニカルパスを適用していくことが可能であることが示唆された。

引用文献

- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- Zander, K. (1988). Nursing case management: Strategic management of cost and quality outcomes. *Journal of Nursing Administration*, 18, 23-30.

9. 成人型アトピー性皮膚炎患者の痒みに対する不安に関する検討

樋町 美華

【目的】近年、アトピー性皮膚炎 (Atopic Dermatitis; 以下AD) は成人期にまで遷延する例 (成人型AD) が増加している。その原因に、AD症状の増悪と不安の関連が指摘され (Linnet & Jemec, 1999), 不安が成人型AD患者の搔破行動を強めていることが明らかにされている (Jordam et al., 1974)。しかし、成人型AD患者の不安の対象は明確にされていない。また、成人型AD患者の健康関連 Quality of Life (健康関連QOL) は、痒みや不安が原因となり低下しており (高

森, 2005), 成人型AD患者の不安が症状と健康関連QOLに関連していることが指摘されている。しかし、十分な知見は得られていない。そこで本研究では、成人型AD患者の痒みに対する不安について明らかにし、またその不安が搔破行動と健康関連QOLに与える影響について検討することを目的とした。

【結果および考察】

1) Itch Anxiety Scale for Atopic Dermatitis (IAS-AD) の開発

まず、成人型AD患者の痒みに対する不安を測定するための尺度がないため、その開発を行った。先行研究においてAD患者の悪化要因である38の刺激や状況を収集し項目を作成した。収集した項目は皮膚科医によって適切であると判断された。調査対象は学生群294名とADと診断されている学生AD群44名であった。IAS-ADの因子構造を明らかにするため不適切な項目を削除し最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った結果、2因子17項目を抽出した。Cronbachの α 係数を算出したところ、高い信頼性が得られた ($\alpha = .91$)。また、学生群と学生AD群のIAS-AD得点についてt検定を実施した結果、学生AD群の得点が有意に高かったことから、IAS-ADの判別的妥当性が認められた。したがって、IAS-ADは高い信頼性と妥当性を有する尺度であることが明らかとなった。

2) IAS-ADが搔破行動および健康関連QOLに与える影響についての検討

学生群183名およびADに罹患している患者群84名を対象に、IAS-AD得点についてt検定を行った結果、患者群の得点が有意に高く痒みに対する不安が学生群よりも強いことが示唆された。成人型AD患者の痒みに対する不安が搔破行動と健康関連QOLに与える影響について健常な成人と比較検討するため、学生群および患者群を対象にパス解析による多母集団同時解析を行った。モデルの適合度はおおむね良好であった (GFI=.99, AGFI=.87, CFI=.99, RMSEA=.08)。パス解析の結果から、患者群、学生群ともにIAS-ADから健康